

# 祭司ザカリア——洗礼者聖ヨハネ誕生日（6月24日）に寄せて

2018/06/26 奈良朝拝会

井田 泉（日本聖公会奈良基督教会）

## ルカによる福音書第1章

5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。

8 さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。

1:12 ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。13 天使は言った。

「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

## ザカリアの物語

ザカリアは先祖代々、主の神殿で祭司の務めをしてきた人でした。その妻エリサベトも祭司の家系をくむ者です。二人はユダの山里に暮らしており、ザカリアは当番のときなど、必要に応じてエルサレム神殿に行き、務めを果たす、という生活でした。二人とも神の前に正しい人で、非の打ち所がない、とまで言われていました。二人は長い間子どもが与えられることを願い祈ってききましたが、叶えられず、すでに年が進んだのでもうそのことは諦めていました。

ある年の8月、ザカリアの属するアビヤ組が当番となり、神殿で務めを果たしていました。その際、聖所に入って香をたく役割を決めることになり、くじを引いたところザカリアが当たりました。祭司の数はとても多かったので、聖所に入って香をたくという役目が当たることは極めてまれで、一生に何度もあることではありませんでした。

聖所で香をたくというのは、主なる神が臨在されるその間近まで入って、人々の祈りを代表して祈るという意味を持っています。香の匂いと煙は、祈りが神に向かって立ち上ることを意味します。もしその際に何か神の示しがあれば、その内容を人々に伝えなければなりません。このよ

うに神と人々を仲介するのが祭司の務めでした。

多くの人々が神殿の境内で待ちながら祈っています。

手を洗って身と心を清め、正式の祭服を着て聖所に入り、定められた聖具を用いて香をたきます。非常に畏れ多く、緊張することです。同時に、祭司として神と人に仕えることの使命と充実を感じる時でもあります。

そのとき、予想もしないことが起こりました。主の天使が現れて香壇の右に立ったのです。わたしは恐怖の念に襲われました。天使は言いました。

**「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。……」**

わたしはあまりのことに震えながら、やっとうい言いました。

**「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」**

年齢的にもう不可能だと思ったのは事実ですが、それ以上に天使の言葉の重大さにとても耐えられない思いでした。

天使は答えて言いました。

**「19 わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」**

どれくらい時間がたったのでしょうか。わたしはようやく務めをなし終えて、外で待っている人々の所に戻りました。しかしわたしは恐怖と衝撃に捕らえられたままで、何かを言おうと思ってもまったく言葉になりませんでした。

わたしは口が利けなくなってしまったのです。しかし天使の言葉は現実となりました。妻エリサベトは身ごもったのです。わたしは神のわざが現実となって進んで行くことを思い、深い畏れと感謝をもって祈りの日々を過ごしました。

およそ 10 ヶ月後、エリサベトは男の子を産みました。近所の人たちや親戚の人たちがお祝いに駆けつけてくれました。8 日目、その子に割礼を施し、名前を正式に付けることになりました。妻のエリサベトは、わたしが聖所で経験したことのあらましを何とか伝えてありましたから、天使から聞いたとおり、「ヨハネ」と名付けようとしたのですが、親戚の人々はわたしの名前を継がせて「ザカリア」とすべきだと主張します。「ヨハネ」など、親戚にはそんな名前の者はだれもいないからおかしいと言うのです。しかし妻は譲りませんでした。

そこで親戚たちはわたしに「何と名付けたいのか」と手振りでも尋ねましたが、わたしは口が利けません。そこで板を持って来てくれるように手振りでも合図しました。板の上にわたしは大きく「この子の名はヨハネ」と書きました。天使の言葉どおりにしなければならぬのです。すると皆はと

でも驚きました。その「ヨハネ」の字に、わたしは神さまのわざが実現しつつあることの感謝と感動と、それに従う決意をこめたのです。

そのとき、突然わたしの口から声が、言葉が溢れ出て来ました。神への賛美と感謝の言葉です。人々は非常に驚き、また恐れを感じました。この話はユダヤの山里に広がっていきました。

「1:66 聞いた人々は皆これを心に留め、『いったい、この子はどんな人になるのだろうか』と言った。この子には主の力が及んでいたのである [直訳<主の手が彼と共にあった>]。』

わたしは聖霊に満たされて心からほとばしる賛美の歌を口にしました。それは後に「ザカリアの賛歌」と呼ばれて、キリスト教会の礼拝で用いられるようになりました (ルカ 1:67-79)。

ヨハネは成長してやがて家を離れ、荒野で呼ばわりつつ、人々の悔い改めを促し、ヨルダン川で洗礼を受け、来たるべき神の救いと審判に備えるように求めました。

ヨハネは救い主の到来を告げ、しかも何とその当の方、イエス・キリストに洗礼を受けました。

天使があの時、わたしに告げたことはことごとく実現しました。

「14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

あの子ヨハネはわたしの、わたしたち夫婦の喜びでした。彼ヨハネは聖霊に満たされて、多くの人々を主なる神に立ち帰らせました。そして救い主到来の備えをしました。

ヨハネのうちに聖霊が働いておられたので、彼は弱者とされた人々の力となり、他方、権力を持った人々の罪を厳しく批判しました。そのため、ヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパスに首をはねられるという悲しい生涯の閉じ方をしたのです。

しかしそのようにして、ヨハネは真に救い主の先駆者となりました。彼は救い主に先立って殺されて死にました。そのようにして彼は救い主と一体になり、そのゆえに救い主の復活とともに彼も復活の命をいただいていると信じます。

わたしは後の人々が、ヨハネが命をかけて指し示したイエス・キリストを知って、この方を信じるようになることを願っています。この腐敗し愛の枯渇した世界に、正義と愛を回復し、神の国が前進するために、聖霊が多くの人々に注がれることを祈ります。神を信じて勇気を持って行動する人が必要なのです。そして、彼の名前ヨハネ=主は恵み深い、という事実を、多くの人々が深く経験することを切に願い求めます。